

『ジゼル』第2幕のヒロイン像における誘惑のテーマ—19世紀ジゼル像とガリーナ・ウラノワのジゼル像をめぐる—
新井ちひろ

近年、『ジゼル』の歴史が明らかになりつつある。2024年には2冊の重要な書籍が刊行された。国内の7名の研究者とジャーナリストらによる『ジゼル—初演から現代まで』（せりか書房）は、それぞれの専門領域に根差した豊富な知見が貴重な資料とともにまとめられている。海外では、バレエ史・音楽研究者の Doug Fullington と Marian Smith の共著 *Five Ballets from Paris and St. Petersburg* (Oxford University Press) が出版された。こちらもまた、『ジゼル』とその他4作品の研究成果が、これまで活字化されていなかった資料の英訳とともに掲載されている。

しかしながら、ヒロイン像の歴史の変遷にはいまだ検討の余地がある。本発表では、先行研究がほとんど言及していない「ジゼルのヴィリらしさ」をめぐる問題を取り上げる。初演から今日までの作品解釈の変化を網羅的かつ一貫した視点で論じることは容易ではないが、そうした企ての一端として、以下の二つの時代のジゼル像を比較する。一つは初演とその周辺の時代であり、この時期のジゼル像を便宜的に19世紀ジゼル像と呼ぶ。もう一つはソ連時代のダンサー、ガリーナ・ウラノワが演じるそれである。初演との間に時代の隔たりがあるものの、19世紀の複数の史料をもとに独自の版を振り付けたアレクセイ・ラトマンスキーが19世紀ジゼル像との類似性を指摘しており、また後世への影響力も大きなダンサーである。

〈研究の背景〉

初演台本によれば、ヴィリとなったジゼルは、アルブレヒトを救いたいと願いつつもミルタの命令に従って彼を誘惑する。換言すれば、捕らえられたアルブレヒトを踊らせる役割は他のどのヴィリでもなくヒロインに与えられているのだ。恋人を守ろうとする彼女の愛が本作のテーマの中核にあることは疑いようがないが、少なくとも1841年の構想の時点ではジゼルは相反する別の側面、アルブレヒトを誘惑せざるをえないヴィリとしての側面を持っていた。

ひるがえって今日の各バレエ団のパンフレットやダンサーの言葉に目を向けると、アルブレヒトを踊らせるのはミルタであり、ジゼルは彼を守るといった語られ方がしばしばなされる。初演台本に書かれたジゼルのヴィリとしての誘惑の力が後景化し、代わりにアルブレヒトに対する守りや赦しの印象がより強くなっているように見受けられる。発表では具体例をあげながらこの点を説明する。

〈資料と分析〉

19世紀とウラノワのジゼル像の比較にあたっては、とくに第2幕のジゼルが見せるヴィリらしさに注目する。資料としては、19世紀ジゼル像については台本、ジュスタマンの舞踊譜、リハーサル楽譜（スミスの英訳に拠る）、公演評を、ウラノワについては本人が書き残した文章、批評家リヴォーフ＝アノーヒンの評、映画『バレエへの招宴』収録の1956年の映像を参照する。

19世紀の資料からは、ジゼルのアルブレヒトに対する誘惑が台本上の設定に留まらず、振付家や観客の間でも共有された解釈だったことが分かる。一方でウラノワのジゼルに対しては、誘惑の要素は一切なく、ミルタに打ち勝つほどの愛によってアルブレヒトを守ることを強調したとの言説が確認できる。

〈考察〉

上記の分析結果を当時の文脈に即して理解するため、ロマンティック・バレエの時代に頻繁に作中に登場するようになった妖精などの超自然的存在が、両時代にどのような意味を持っていたかを論じる。こうした超自然的存在を本研究では妖精と総称する。ロマンティック・バレエにおいては、妖精が男性登場人物を別世界へと誘い込むというパターンが存在した。ヴィリは今日では冷酷で高圧的な存在として理解される傾向にあるが、当時の観客にとっては「誘惑する妖精」の一種であったと考えられる。

ひるがえって1930年代以降のソ連では、社会主義リアリズムの要請に応えるべく演劇的バレエというジャンルが登場した。演劇的バレエにおいては人間の内面を描くことが奨励され、登場人物を非現実の世界へと誘う妖精のモチーフは乗り越えるべき過去のバレエの象徴であった。『ジゼル』においても、生前から変わらず貫かれたヒロインの意思を強調するほうが、演劇的バレエの理想にかなっていたと言える。

〈結論〉

19世紀には、同時代の他作品と同様に、『ジゼル』のヒロインも人間を誘惑する妖精として理解されていた。ウラノワにおいては誘惑のモチーフは忌避され、代わりに自らの意思を貫いてアルブレヒトを守るジゼルの愛が重視された。また彼女の演じるジゼルは、これまでに19世紀の資料に見られる特徴との類似性が指摘されていたが、第2幕でのヴィリらしさについて言えば、むしろ今日的な解釈と一致している。

本発表が『ジゼル』のキャラクター解釈の時代ごとの変化をさらに詳しく検討していくための契機となれば幸いである。